再臨のキリストによる
第２福音書

ヘルメスの杖・上

―小錬金術―

THE GOSPEL
BY CHRIST OF
THE SECOND COMING No.2

CADUCEUS

first volume

I

SEIDOU 正道

目次

小錬金術
第２福音書 3
全体の目次 4

序説　杖を持った神
（１）上に昇るための梯子 9
（２）錬金術の教え 14

座標１　混在的一者
（１）妊婦の自他一体性 21
（２）妊婦の外在化 27
（３）母性愛について 30

男性原理と女性原理
（１）定義しておくべきこと 35
（２）移行の概観 37

座標２　教育の初期
（１）男性原理の干渉 43
（２）父性愛について 47

座標３　教育の中期
（１）所属と自己責任 51
（２）共同体への適応 56

座標４　教育の後期
（１）自我の抽出 61
（２）集中と個性 64
（３）因果律と合理性 66
（４）遵法と良識 68

小錬金術

第２福音書

再臨のキリストによる
第２福音書

　ヘルメスの杖・上

――小錬金術

　わたしたちはなにももたずに生まれる。わたしたちには助けが必要だ。わたしたちは分別をもたずに生まれる。わたしたちには判断力が必要だ。生まれたときにわたしたちが持っていなかったもので、大人になって必要となるものは、すべて教育によってあたえられる。

　　ルソー『エミール』今野一雄訳より

Ｉ　序説と混在的一者、教育の段階
（座標１～座標４）

全体の目次

ヘルメスの杖、上　小錬金術———目次

序　杖を持った神

座標１　混在的一者

男性原理と女性原理

座標２　教育の初期
座標３　教育の中期
座標４　教育の後期

座標５　自我の確立

分化から総合へ

座標 5.1
アルベド侵入の起点

座標６
アルベド侵入の初期
座標７
アルベド侵入の中期
座標８
アルベド侵入の後期

根源苦とニグレド

座標 8.9　恩寵の原理

序説　杖を持った神

（1）上に昇るための梯子

イエスとヘルメス

第一福音書『テロス第一』において、私は、二つの宗教的なベクトルを呈示した。神の人間化を意味する「↓」と、人間の神化を意味する「↑」である。

宗教史において「↓」――つまり「神の人間化」を象徴するのは、イエス・キリストである。文字どおりに彼は「神が人間の子として生まれた」という設定を持っているからだ。

そして他方の「↑」――つまり「人間の神化」を象徴するのは、東洋でならば釈尊、西洋でならば「ヘルメス」ということになる。

その理由はこうだ。まず釈尊であるが、彼は、悟りの階梯を昇りつめることによって、仏（神的存在）となった訳だから、当然「↑」を体現している。

他方ヘルメスのほうは、錬金術における神であり、この錬金術こそは、西洋に現れた「仏教的思想」なのである。グノーシス主義、錬金術、パラクレートの思想――これらは、西洋に現れた「仏教的思想」の系譜に他ならない。それについては第一福音書において、詳しく説明しておいた。

ただし、錬金術におけるヘルメスは、ギリシア神話における「使者の神ヘルメス」とは少し違う。我らのヘルメスは、エジプトの神「トート」と習合（合体）したヘルメスだからだ。

エジプトは、古代錬金術のふるさとであり、トートは学問や知恵を司る、エジプト神話の主要神である。

かかる習合神ヘルメスを尊称で呼べば「ヘルメス・トリスメギストス」となる。これは「三倍も偉大なるヘルメス」という意味である。

ヘルメスの杖という曼荼羅

ヘルメス・トリスメギストスは、ギリシア神話のヘルメスと同様に、その手に杖を持っている。その杖は、ケリュケイオン、カドケウスなどと呼ばれるが、このさい名称などはどうでもいい。そのフォルム（形状）の重要性からすれば、そんなものは、ごく些細な話である。

私はこれから「↑」を、換言すれば「人間の神化」の過程を、段階論的に示そうとしている。そして、その内容を図式的にも表そうと思っている。

するとである。その図式は、本当にピッタリと、このヘルメスの杖の形状に当てはまってしまうのだ。

つまりヘルメスの杖は、錬金術的な段階論にとって、まさに曼荼羅にあたるのだ。曼荼羅とは、悟りの世界観を、視覚的に表した図のことをいう。

ヘルメスの杖と DNA

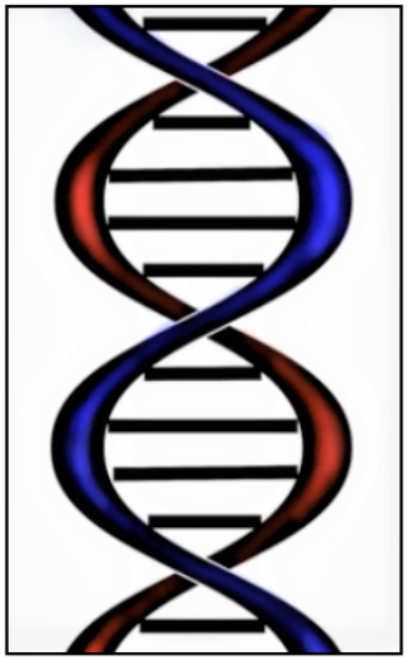
それともう一つ、ヘルメスの杖の形状を眺めていて、自然と思い浮かぶものがある。それは、かの「DNA の二重らせん構造」との酷似である。

DNA とは、私たち生物にとって、その肉体の設計図とも言えるものだ。少し専門的な話をするならば、細い紐状（全長２メートル）になっている DNA の中の約 1，5 %が遺伝子と呼ばれている。

残り 98，5 %の DNA にも重要な情報が含まれている。昨今では、DNA の全体情報があれば、その DNA の持ち主を、かなり精密に、画像として再現することが出来るようになった。それほどにも私たちは、自分の形態や性質を、この DNA から与えられていることになる。

そして、見てのとおり、この DNA の形と、ヘルメスの杖の形が、驚くぐらいにそっくりなのである。とくに塩基で結ばれた DNA の形状は「ねじれた梯子」そのものと言える。そして、後述するように、私はヘルメスの杖を、ある種の梯子に見立てているのだ。

ヘルメスの杖



DNA の二重らせん

2022-05-24 ＼＼ (4 ＼＼).png

人間は聖書を抱えて生まれてくる訳ではないし、密教の曼荼羅を抱いて生まれてくる訳でもない。だが唯一、ヘルメスの杖に関してだけは、その相似形にあたるものを、DNA として、細胞の一つ一つに抱えながら生まれてくるのである。

しかも DNA は、高性能の顕微鏡を使わなければ、物質としては見ることが出来ないものである。なのに、それと同じ形状のものを、何千年も前の人たちが、ものの見事に図案化しているのだ。しかも「尊いもの」として。神さまの持ち物として。

これは、まことに不思議なことだと思う。彼らは何によって、その尊き形状を知ったのだろうか。

もちろん、その答えを知る手立てはない。だが私には、この不可思議さに、錬金術の「教えとしての根源性」あるいは「根本原理性」が表れているような気がしてならないのである。

人間と神をつなげる梯子

さて、ではこれから「人間が神に近づきながら変容していく過程」を追っていってみよう。むろん、ヘルメスの杖の形をなぞりながら。

ヘルメスの杖は、いわば人間の地平と、神の視座をつなげる梯子であり、すべての人間は、この梯子を登っていく義務を持っている。

なぜなら、潜在的には、すべての人間の心のなかに「人間＝神」という本質的自己が存在しているからだ。つまり人間というものは「人間であると同時に神であること」が本来的な状態であり、自然的な状態なのである。

にも関わらず、本来的、自然的な状態から離れれば、その人間は、違和感によって苦しまざるを得ない。また、離れれば離れるほど、苦しみの度合もまた大きくなる。

よって、この苦しみというものは、何となれば「その苦痛から逃れたいなら “本来の自分” に戻れ」という、内奥からの喚起の声とも解釈することができるのだ。

その声に従ってヘルメスの杖を昇るならば、それまでの苦しみは、当然のこと軽減されるだろう。梯子を一段登るごとに、人間は神に近づくからである。しかし、内心からの声に従わないならば、彼は自分の苦しみを、さらに、いや増しにするしかないだろう。

如来蔵思想とヤコブの梯子

さて、これまで語ってきたことは、じつは仏教における如来蔵思想と同じものである。

つまり仏教においては、全ての人間の心には、仏と同質のものがあるとされているのである。これを「一切衆生悉有仏性」という。

グノーシス主義の文献『ヨハネのアポクリュフォン』には、本来的な自分（人間＝神）が、迷える「表面的な自分」に向かって必死に呼びかけている言葉が記されている。なお「アポクリュフォン」とは、秘密の教えといった意味の言葉である。

――本来的自己が言う。

*　起き上がれ、そして想い起こせ。なぜなら君はすでに〔自分が神であることを〕聞いた者なのだから。君の根っこ、すなわち憐れみに富むこの私に立ち戻れ。

大貫隆訳著『グノーシスの神話』より*

このような声を聴いてか、人は遅かれ早かれ、意識的にせよ無意識的にせよ、ヘルメスの杖という梯子を登っていく。

となれば『創世記』に出てくる族長ヤコブは、もしかしたら、この梯子をして、それを階段として幻視したのかもしれない。

〔ヤコブが〕とある場所に来たとき、日が沈んだので、そこで一夜を過ごすことにした。ヤコブはその場所にあった石を一つ取って枕にして、その場所に横たわった。すると、彼は夢を見た。先端が天まで達する階段が地に向かって伸びており、しかも、神の御使いたちが、それを上ったり下りたりしていた。

　このヤコブのように、人が梯子（階段）の全体像を見たり、把握することは稀であろう。
　しかし読者が、実際にヘルメスの杖を登ったならばである。その全体把握は叶わなくとも、梯子を登っていくという感覚、精神が上昇していくという感覚は、必ず味わうことになるだろう。

梯子登りのエネルギー源

　さて、先にも言ったとおり、梯子登りのエネルギー源は、
「彼の意識が、彼本来の心像である『人間＝神』と重なり合うまでは、自分のあり方に違和感を覚えて落ち着かない」という理由である。
　しかし、そこまで事の本質が見えていない場合は、より無意識的に、
「上昇していくというムーブメント（動き）そのものが、人間精神本来のあり方である」
　ということが感知される。理由は分からなくとも、なぜか「そういうものだ」と心が納得するということである。
　だから反対から言うと、梯子登りをしていないと、何らかの違和感が生じることになる。
　そうであるならば、長らくの停滞や退転といった「非本来的な状態」にあるときには、彼にはペナルティー（処罰）すら課せられることになる。つまり潜在意識にひそむ本来的な彼、つまり「人間＝神」が、非本来的な彼を裁くわけだ。
　このペナルティーは、さきに「違和感」と表記したものと同質のものである。
　しかし現実には、とても、そんな軽い話では済まないこと起こってくる。よって、違和感よりも数等深刻な響きがする「ペナルティー」のほうが、表現として、よりこの場に相応しいだろう。
　では、ヘルメスの杖という梯子を登らないと生じる「ペナルティー」とは何か。
　それは時に自己処罰的な神経症であり、他人への責任転嫁によって生まれる、人間関係の軋轢である。
　いや、煎じ詰めれば、人のあらゆる苦しみがそこから生まれる、と言っても過言ではないのかもしれない。

（２）錬金術の教え

小錬金術と大錬金術

ヘルメスの杖の梯子登りを、化学的思考のなかで教義化したのが錬金術である。そして錬金術において神は「金」に喩えられている。

したがって「人間＝神」は、錬金術では「黄金の現成」として語られることになる。

この錬金術には目的達成、つまり黄金の現成（人間＝神）までに、大きく言って、二つの段階があるという。

第一の段階は「銀」を生成するまでの過程で、通例「小錬金術」と呼ばれている。そして第二段階が、銀を変容させて「金」を生成する段階であり、こちらは「大錬金術」と呼ばれる。

たしかに中世には、本気で “物質的な” 銀や金を生成しようとした錬金術師もいた。

しかし、銀や金は化合物ではなく元素であり、元素は核融合によってしか生成されない。であるのに、実験室で行われていたのは化合の作業である。それでは銀や金が生成されるはずもない。

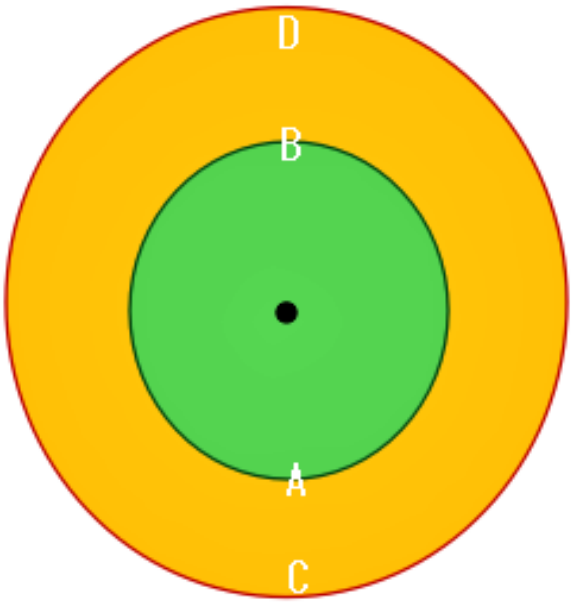
しかも、金にいたっては、それこそ「宇宙が振動するほどの衝撃」がなければ、その核融合が起こらないのである。

つまり中世錬金術によって、物質的な金や銀が生成されることは “絶対に” あり得なかった。

だから逆に言うと、真に錬金術師たちが求めたのは、結局「物質的な金や銀」ではなかったのである。彼らが求めたのは――彼が高尚であればあるほど――「銀のごとく価値ある悟り」であり「金のごとく価値ある悟り」だったのだ。

この二つの段階を、私なりに解釈すれば、次のような二重の円で示すことが出来る。

円の中心は、人間の自我にあたっている。よって、その自我を中心にして、二つの同心円が描かれていることになる。



2022-05-25.png

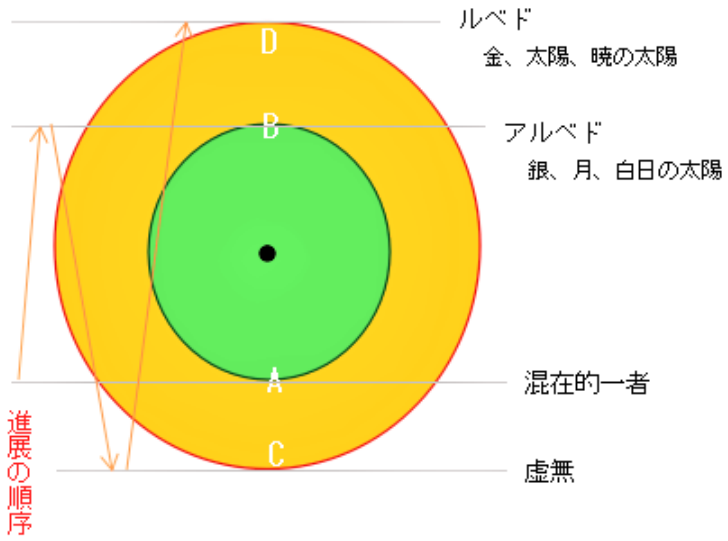
内径、つまり小さなほうの円が「小錬金術」にあたる。その小円の下限である A は後述する「混在的一者」を指し、小円の上限である B は「アルベド」を指し示している。アルベドは、象徴的に「銀、月、白日の太陽」を表している。

それに対して外径、つまり大きなほうの円は「大錬金術」にあたる。大錬金術とは、小錬金術で獲得した銀を変成させて、金を得る過程である。

この大錬金術については『第三福音書』で叙述するので、その内容を、ほんの少しであっても、こんなところで漏らすのは尚早すぎるかもしれない。だが、ここで一応「錬金術全体」の概観を得ようとしているので、尚早を承知のうえで、あえて語っておこう。

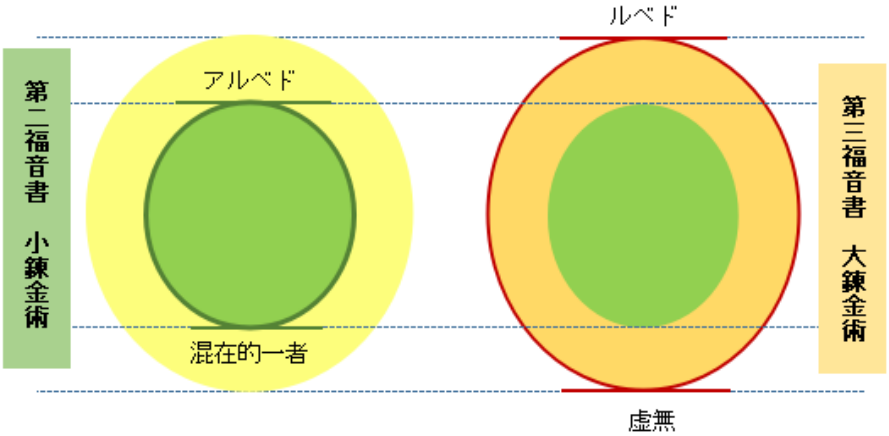
してみると、大円の下限である C は「虚無」を指し、大円の上限である D は「ルベド」を指し示している。ルベドは、象徴的に「金、太陽、暁の太陽」を表している。

よって錬金術とは、A の混在的一者から始まって、B、C を経由し、D のルベドで金を得るまでの過程ということになる。



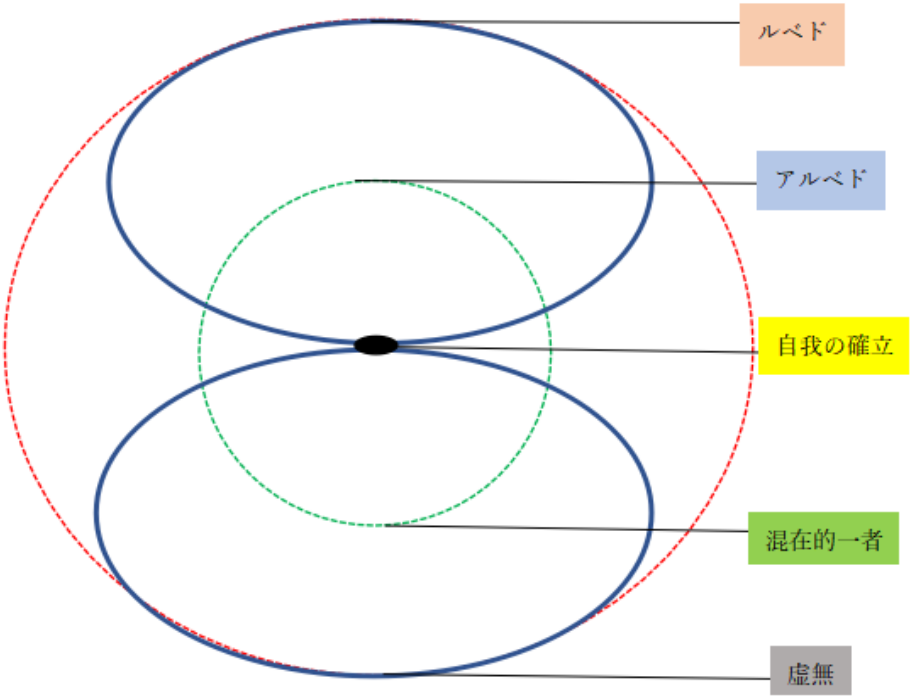
2022-05-26 ＼ (5 ＼).png

そして、上掲の二つ（二重）の円に倣い、二冊の『ヘルメスの杖』は、上巻（第二福音書）で「小錬金術」を扱い、下巻（第三福音書）で「大錬金術」を扱うことになる。



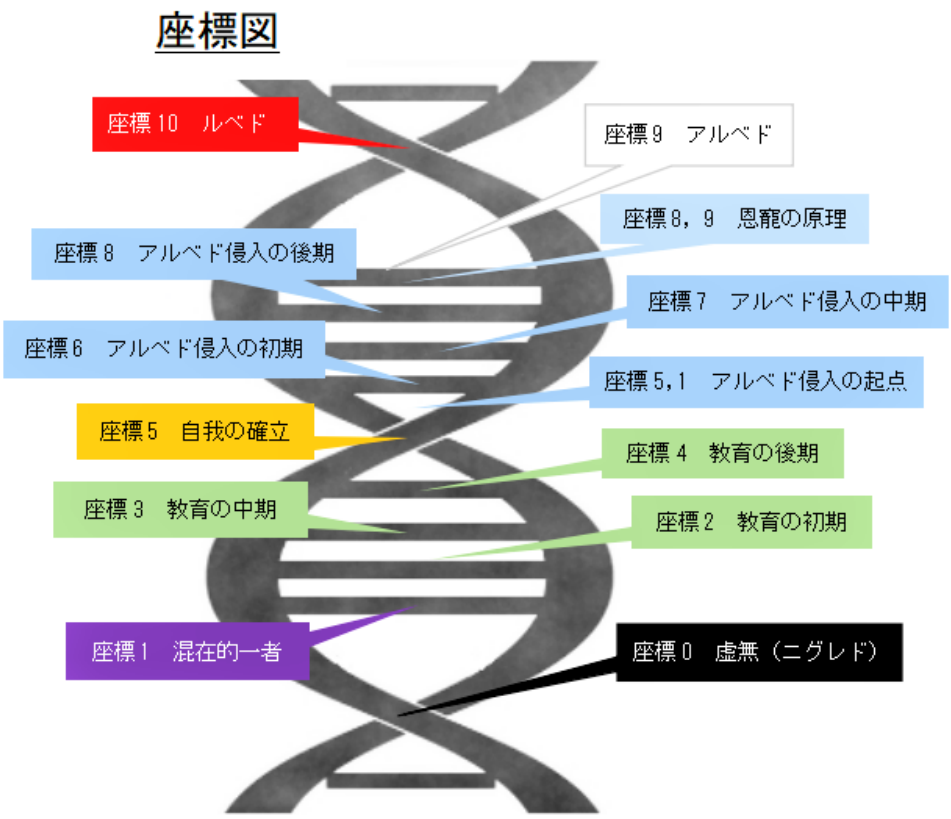
2022-05-25 ＼ (3 ＼).png

そして、二つの同心円に「ヘルメスの杖」のフォルム（黒い線）を重ねると、次のような図になる。



2022-05-25 ＼ (4 ＼).png

さらに、これに座標ごとの細かいタイトルを加えてみる。それが下図である。私はこれを「座標図」と呼んでいる。



2022-05-26 ＼(4＼).png

結局これが『ヘルメスの杖』上下巻の基本設計図である。極端な話をするなら、これから先の叙述は、この設計図の注釈だと言ってもいいだろう。

それぞれの座標に番号をふったので、読者にあっては、その番号を頼りに、記述的理解と、ヴィジュアル的理解とを相互に深めていってもらいたい。

座標１　混在的一者

（1）妊婦の自他一体性

2022-11-22 ＼ (7 ＼).png

「人間の神化」のスタート

ヘルメスの杖という梯子登り、すなわち「人間の神化」の始まりは、人間の肉体的な誕生である。人間が生まれないことには、その神化も生じようがないからだ。

けれども「そんなことは当たり前だ」などと言って馬鹿にすることなかれ。この「誕生の場面」には、実に大きな神秘が隠されているのだ。端的に言って、この場面は「座標９、アルベド」の雛型なのである。

だからアルベド（総合的一者）について学んだあとに、改めて本座標に立ち戻ってみると、じつに興味ぶかい思いがするはずだ。叙述のそこかしこに “アルベドの情景” を思わせる文言が出ているからである。かかる混在的一者とアルベドの間には、座標数にして八つもの間隙（整数のみを数えた場合）があるにも関わらず。

それはさておき、この誕生の場面を、私は「混在的一者」と呼んでいる。この呼び名には、

「そこでは、何かと何かが “混ざり合うように” くっついている。ならば、それは “一つのもの” として扱うのが妥当だろう」

という思いが込められている。

化学的錬金術においても、作業の始まりでは、まずカオス（混沌）状態にある物質を用意することが要請される。すなわち、必要な材料を混ぜて熱すること。そうして、あつくてドロドロのペーストを作ることが、錬金術のスタート地点の風景なのである。

母親と子供のペア

錬金術におけるカオス的ペーストの材料は、たいがい水銀と硫黄である。これらがフラスコの中で混ぜられて、炉で熱せられることになる。

それに対して、私のいう「混在的一者」において混ざり合っているのは、母親と子供の存在である。そして、特別な指定がないかぎり、読者にあっては、その子供を、男の子だと思っていただきたい。つまり「母 - 息子」のペアだ。

また私は、その男の子のことを「主体」と呼ぶ。主体は、この『ヘルメスの杖』全体の主人公名であり、それはじつに第三福音書の終わりまで続く。

この「主体」は固有名詞ではない。だから、その “抽象的な名称” にふさわしく、私は、ときに自由に、ときに曖昧に「主体」という主語を使うことになるだろう。

また、座標が高まるごとに、主体はまるで別人のように成長していくだろう。だとすると、読者にとり、そこに「一貫した同一性」を見つけることは、ちょっと難しいかもしれない。

しかし基本的には、主体とは、本章で生まれた男の子であると考えていただきたい。『ヘルメスの杖』は、主体を主人公にした成長物語でもあるのである。

妊婦

さて、母と息子の存在が混じりあった「混在的一者」であるが、この混在的一者は、主に二つの要素に分けることが出来る。もっとも、要素というよりは、二つの場面とか、二つの時期と言ったほうが適切かもしれない。

まず第一の場面が「妊婦」である。つまり自身のお腹に赤ちゃんを宿した母親のことだ。この妊婦のなかで「母‐息子」のペアは、たしかに「一つの存在」「一人の人」として成立している。妊婦において人は「二人でありながら一人」である。

それは考えてみれば当たり前のことだが、不思議と私たちは、この事実を、気にもとめない。だが改めて気にとめてみれば、その子宮のなかに胎児を収めた母親は、どう見ても、どう考えても「二人でありながら一人」の存在なのである。

すでに懐かしい話になってしまったが、実際に、妊婦であった時期の妻に向かって、

「ママは、今ひとり？　　それとも二人？」

と尋ねたことがある。そのときの答えは「分からない、どっちだろう」だった。つまり、どちらでもないし、どちらでもあるのだろう。二人で一人という状態（＝混在的一者）は、論理的には矛盾そのものであって、明確に人数を数えられるものではないからだ。

そういう意味では、妊婦というものは、論理性をこえた場所に立っている「神秘そのもの」と言えるのかもしれない。

強大な母と微弱な息子

ただし「母‐息子」のペアが妊婦状態にあるとき、胎児（息子）の人格は、まったくと言っていいほど確立していない。

たとえば、胎児にマイクを差し出して「君の人間性について知りたい」とインタビューしたとしよう。むろん、息子には、それに答えられるだけの、経歴も能力もまったく無い。それは、当たり前すぎるほどに、当たり前の話である。

他方、母親にマイクを向ければ、もちろん彼女は、自分の人間性について、ひとかどの答えを披露することだろう。彼女には、それを語るために必要な経歴も能力も、ちゃんと備わっているからである。

となると、ここに見られる、母と息子の「存在の重み」の違いは明白である。だから「妊婦状態の一者性」を図式的に表せば、息子の微弱な存在を、母親という巨大な存在が、まるっきり包み込んでしまっているような形になる。

であれば、「妊婦」の場面における一者性とは、それが「母‐息子」の合一だとしても、その存在感の大部分は、母親が担っていることになる。すなわち「母も息子も、適材適所によって、同等の存在感を表出している（＝総合性）」という訳では全然ないのだ。

ここで母と息子は、せいぜい “混在” によって、一つにまとめられているだけである。単に混ざって融合しているだけである。それだから私は、この段階を「混在的一者」と呼ぶのである。

天と地のシンメトリー

そのような混在によるものに過ぎないとしても、妊婦にあっては、肉体的に、たしかに「自他一体」が実現されている。自分と他人（主体と母親）が一つになっている。

そしてアルベドにおいても、これと相似した「自他一体」が成立している。というより、混在的一者（座標１）における自他一体は、天なるアルベド（座標９）で実現される、霊的な自他一体の、現世的な対応物なのだ。

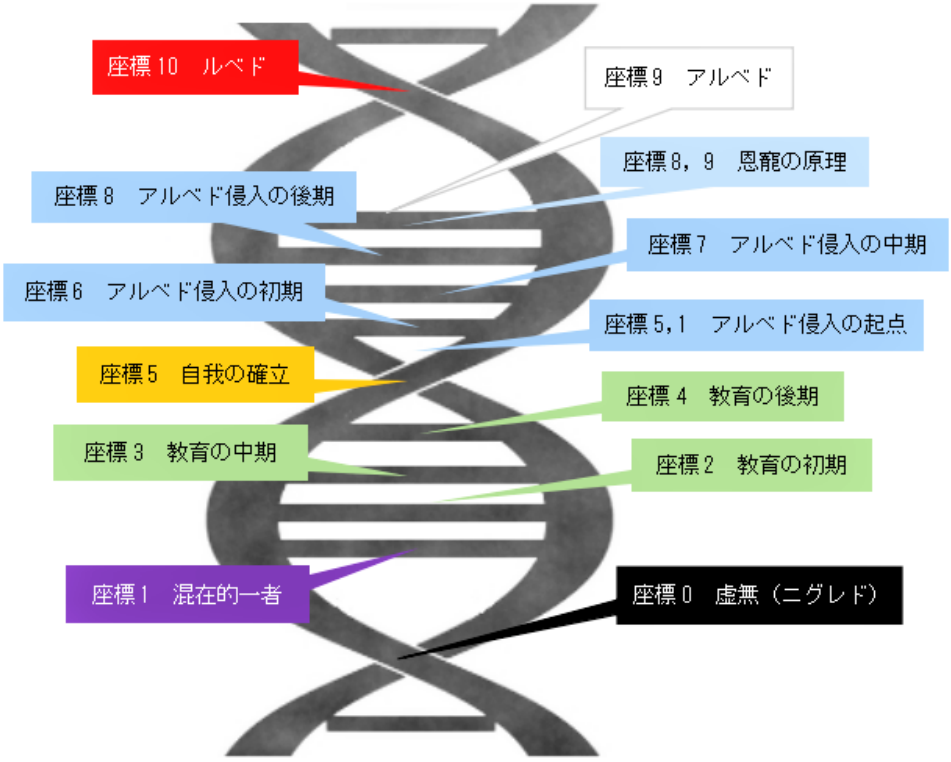
アルベドにおいては、肉体に依らず、「全にして一」「無限」という認識（グノーシス）によって、自他一体が実現されることになる。

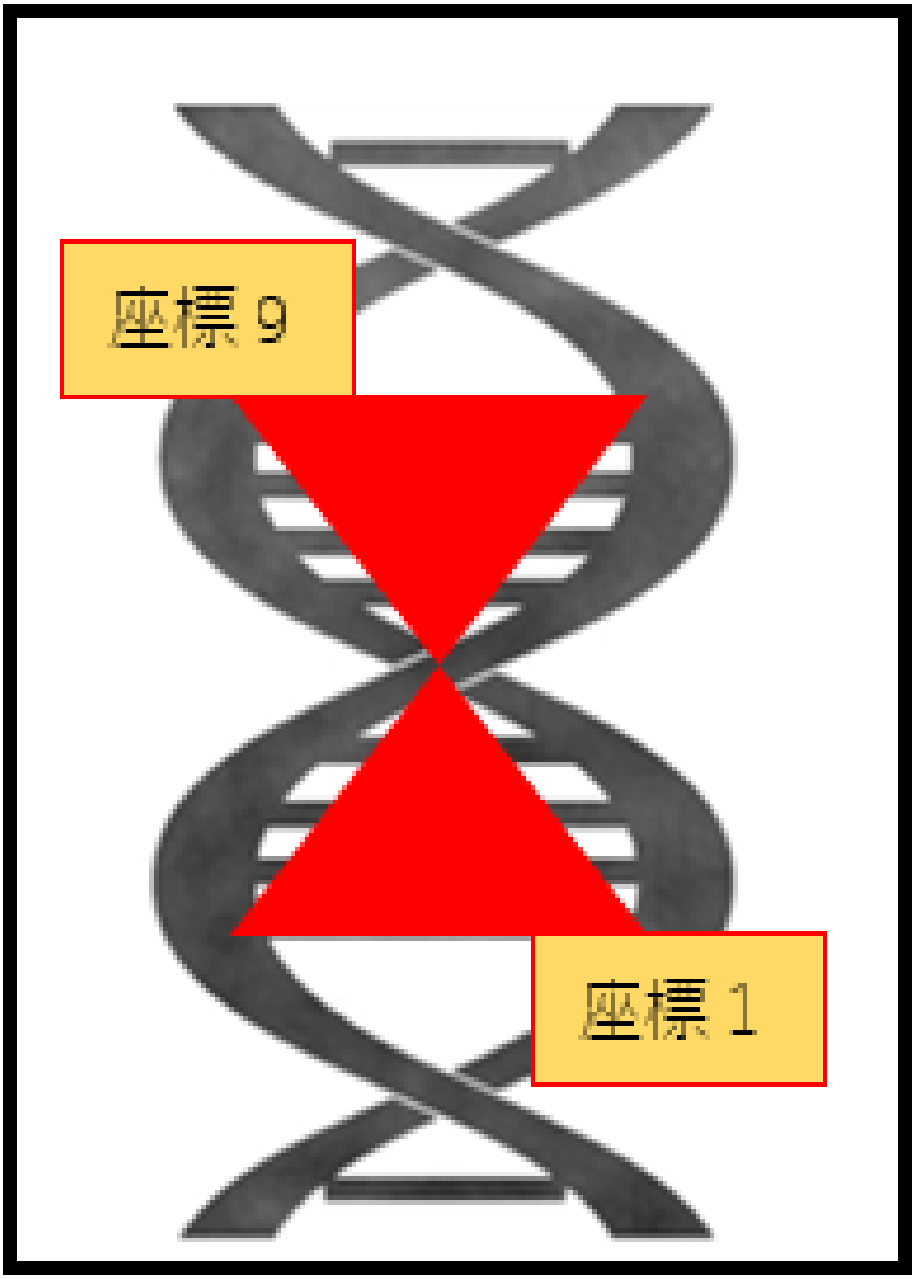
その詳しい内容については、とうぜん叙述の場所を後段（座標９）に回す。

ただ、妊婦（座標１）とアルベド（座標９）が、天と地のごとく、上下の対応物として配置されている事については、今の段階でも注目しておいてよい。

もっと正確にいえば「自我の確立段階（座標５）を折り返し点にして、妊婦とアルベドが、上下にシンメトリーを描いている」ということになる。どうか、いま座標図を見て、その上下対称のフォルムを確かめてほしい。

座標図


座標10　ルベド
座標9　アルベド
座標8，9　恩寵の原理
座標8　アルベド侵入の後期
座標7　アルベド侵入の中期
座標6　アルベド侵入の初期
座標5，1　アルベド侵入の起点
座標5　自我の確立
座標4　教育の後期
座標3　教育の中期
座標2　教育の初期
座標1　混在的一者
座標0　虚無（ニグレド）



　そうすれば次のことが分かるだろう。かのヘルメス・トリスメギストスが残したという、錬金術の根本経典『エメラルド板』には、
「一なるものの奇跡を成し遂げるにあたっては、下にあるものは上のあるものの如く、上にあるものは下にあるものの如し」
　と書かれているが、ここにその経典どおりのことが行われているという事が。

（２）妊婦の外在化

体外妊娠期間

混在的一者の “第二の場面” は、主体（母親から生まれた息子）が、生後およそ 10 か月を迎えるまでの期間である。人類学者のアシュレー・モンタギューは、それを「体外妊娠期間」と呼んだが、実に言いえて妙である。

この期間は、要するに「妊婦の状態が、母体の外側で再現されている状態」にあると考えてよいだろう。

すなわち、出産されたことにより、子供は胎内ではなく、すでに母親の体の外側にいる。けれども、それを心理的に見れば、両者はいまだに妊婦のごとく一者化している、ということである。

これは、ある意味、きわめて人間的な状態だ。

動物は、生まれるとすぐに、四つ足で立ち上がろうとする。そして、生まれてから一時間もすると、実際にも立ち上がってしまう。

それは天敵から身を守ろうとする、本能的な防衛行動に他ならない。肉食動物が、生まれたばかりの草食動物を狙って襲うのは、自然界における常套手段であるからだ。捕食者にとって、動かない（動けない）的を狙うことほど容易いことはない。

そうだとしたら、立って走って逃げないかぎり、仔どもは今日の命でさえ守れない。

もちろん肉食動物だって、生まれたばかりの時には、ほかの肉食動物の格好の餌食になるほどにも弱い。

ならば彼ら肉食動物だって、捕食される側に回ったときの事情は、草食動物のそれと、なんら変わらないだろう。つまり彼らもまた「立って走って逃げないかぎり、仔どもは今日の命でさえ守れない」のである。

一時間を 10 か月に引き延ばす

しかし人間だけは事情が異なる。

人間の赤ちゃんは、生まれてからすぐに立ち上がろうとなどはしない。

しかも四つ足で歩ける（ハイハイ）ようになるまで、およそ 10 か月の日にちがかかる。いや、日にちが “かかる” というより、10 か月間という長い日にちを、保護者が子に “かけてあげられる” のだ。

これは人間が社会的存在であり、そのコミュニティ（生活共同体）が、動物的な天敵の脅威から逃れているからこそ、成り立つことだろう。もし人間が自然界で孤立していて、なおかつ身近に天敵がいたなら、生後 10 か月未満の赤ん坊など、即座にその天敵の餌食になっているはずだ。

ところが人間の赤ちゃんは、そうした危険などはつゆ知らない。それどころか、人生初発の 10 か月間を、赤ちゃんは平和裏のうちに、母親による「完全なる保護下」において過ごすのである。そして、その母親は、社会的なコミュニティの保護下にある。

いや、もちろんその赤ちゃんは今、母親の胎内からは放り出されている。しかしそのような “胎外” にあっても、赤ちゃんは「いまだ子宮に包まれているかのような保護感」を味わうことが出来るのである。

とすれば、これは主体にとって、強烈に母子の一体感、密接感を味わえる時間であろう。なにしろそれは、動物の「母親から生まれてから歩くまでの一時間」を、10 か月に引っぱり伸ばしただけの期間なのだから。

実際、生まれたばかりの動物の赤ちゃんからは、まだ羊膜さえ取り切れていない。それと同じように、生後 10 か月未満の人間の赤ん坊は、いわば現世に “生まれ切っていない” 状態なのだ。

それはまさに「胎児であること」を、胎外で再現しているような期間なのである。

性格をつくる期間

そのように胎外妊娠期間にあって、主体は、いまだ “生まれ切っていない” 赤ん坊である。

しかし、そうだとしても、この頃の主体には、すでに意識の芽生えがあり、母親との一体感を記憶することが出来る。

もっとも、その記憶は、フワフワと生まれては消えていく泡沫のようなものだ。とても “思い出” になれるほど永続するものではない。

となれば、この期間の「思い出」の担い手は母親であって、決して彼（主体）ではないのだ。

むしろ、この期間における主体の記憶が作りだすのは、思い出ではなく、彼の「性格」だろう。そのことについて見てゆきたい。

じつは、この期間における母子に十分な密着度がないと、主体は「自分がこの世に存在してよい」という事実を肯定しづらくなる。なぜなら、主体の存在を支える最初の基盤は「母親から愛された記憶」「母親に受け入れられた記憶」に他ならないからだ。

それだけに、母子一体感において痩せた記憶しか持っていない主体は、つねに不安と寂しさを抱えているような、卑屈な性格を作ってしまう。

卑屈とは、自分を守ることばかりに必死で、他人を愛するだけの余裕を持っていない、小さな人間を指す言葉である。

心に支えがなくて、すぐにどこかへ転がってしまいそうなハラハラ感。それが他者を

顧みる余裕のない、卑しい心象を作り出すのだと言えよう。

愛された者は愛することを知る

　それを鑑みると、前出の人類学者、アシュレー・モンタギューが語った、
「人は愛されることによってのみ、愛することを学ぶ」という言葉は、とても大切な真実を含んでいると思う。あるいは発達心理学を説いた、エリクソンの、

　与えられるものを得ること、そして自分がして欲しいと願うことを、自分のために誰かにしてもらうことを通して、乳児は同時に、将来自分が“与える者”になるために必要な適応の基盤を培うのである。

　という言葉のほうが、より強く読者の胸に訴えるだろうか。
　いずれにしても、この期間、母親は「子供の欲求をそのまま叶える」という全受容をしなければならない。その全受容によって母親は、主体の心と出来るかぎり密着しなければならない。
　乳を欲しがれば与え、オムツが重ければ取り換え、眠ければ抱っこし、泣くならばあやさなければならない。
　この期間だけは、母親は可能なかぎり、子供が欲しがっているものを、そのまま与えなければならない。子供の存在すべてを「それでよい」と言って受け入れなければならない。
　乳幼児は遠慮を知らないので大変だが、それでも唯一、この単純なやりとりだけが、母と子を一つに結び付けるのである。そして、それによって生まれた密着感が、主体をして「愛されていること」を実感させるのである。

（3）母性愛について

雪の日の風呂

喩えると、この「体外妊娠期間」「外在化された妊婦」の時期は、雪の日の風呂のようなものなのだ。なお、これは主体が四、五歳ぐらいになるまで通用する話である。

この時期、悲しいことに、自分と子供との間に、妙な距離感を作りだしてしまう母親がいる。

彼女は、実世間の大変さを教えようとするあまり、子供に「甘えるな」とばかり、厳しい躾を与えたり、子供と疎遠にしたりする。これをするのは概して、理性的でありたい、道理に則りたい、と願う「知的で良き母」のタイプだ。

しかし、これを「雪の日の風呂」に当てはめると、彼女がやっていることは、寒い外気温に慣れさせようとして、子供が入っている風呂の温度を、なるべく外気の寒さに近づけているに等しい。きっと、この母親は、

「さすがに水には出来ないけれど、外気に慣れさせるためには、風呂のお湯を、ぎりぎりまでぬるくした方がいいのだろう。この子は結局、その寒い “外” に行かなければならないんだから」

とでも言うのだろう。けれども、そんなぬるい風呂に入れられた日には、子供はなかなか風呂から出られない上に、外気に触れたとたんに風邪をひいてしまう。ちっとも体が温まっていないのだから当然だ。

つまり上のような場合、子供はなかなか親離れが出来なくなるし、実世間で生きるにあたっての、自己信頼感（自信）を持ちえなくなる、ということである。

体の芯まで温まった子供

それに対して、世間が厳しいことを知っているからこそ、子供の「人生初発の時期」を、甘い密着性、濃厚な一体感で満たしてあげようとする母親もいる。もっとも、これは考えて行うことというよりは、ただ彼女の母性本能に従って行うことなのではあるが。

このような母親は、雪の日の風呂で「外気が寒いからこそ、子供を熱めのお湯につけて温めてあげよう」と考える者に等しい。

そのような風呂で十分に体を温めた子供は、まず第一にすんなりとその風呂から出ていくだろう。

そして、たとえ雪が降っていようとも、しばらくの間、平気で外を駆けまわることが出来るだろう。体の芯に、まだ余熱が残っているからである。肌の表面は冷たくなっても、決して風邪をひくところまでは行かない、と。

つまり早々に親離れをした彼（子供）は、母親と一体だったときの思い出によって、世間の荒波を超えていくだけの強さを、いつの間にか身に着けてしまっていたのである。

とはいえ、子供相手に「世間」などと言ってしまうと、多少前のめりの感がしないでもない。

しかし思い出してみれば、子供にとっては、保育園や小学校でさえ、たしかに「世間の荒波」であろう。いじめの問題などを鑑みると、私などは、そのように思わずにいられないのである。

それは困難なことか

ところで、母親が子供の欲求を叶えてやることを、私は少々「難しい」ことのように印象づけてしまったかもしれない。

「この期間、母親は『子供の欲求をそのまま叶える』という全受容をしなければならない。全受容によって、主体の心と出来るかぎり密着しなければならない。

乳を欲しがれば与え、オムツが重ければ取り換え、眠ければ抱っこし、泣くならばあやさなければならない。この期間だけは、母親は可能なかぎり、子供が欲しがっているものを、そのまま与えなければならない」

と、子供が欲しがるものを「与えなければならない」「そうしなければならない」という言い方をしてしまったからだ。これでは当然、読者には「あなたは苦労してでも、その義務を果たしなさい」といった調子に聞こえてしまうことだろう。

たしかに眠いときにミルクを用意したり、腕が疲れているのに抱っこをし続けるのは大変なことである。おまけに、何をどうやっても子供が泣き止まない夜もある。

本能が実現可能にする困難

しかし、多くの場面において、この時期、母親が子供の欲求を叶えてあげることは容易である。男には不思議に見えることだが、彼女の母性本能が、その実現困難な課題を難なくクリアさせてしまうからだ。

彼女は、湧き上がってくる母性本能に突き上げられて、ほとんど自動的に、子供が求めてくれば乳房を出し、あるいは粉ミルクを混ぜる。お尻を気持ち悪がって泣けばオムツを取り換え、理不尽なことを言っても、笑ってそれを許してしまう。

そういえば私が子供のころ、鼻づまりで苦しんでいた私の鼻水を、母親が直接口で吸い取ってくれたことがあった。四歳ぐらいのことだと思うが、今思い出すと、母親とは

大したものだと感心してしまう。まったく、さぞ汚かろうに.....

いずれにしても、その子供が、彼女の子供である限りにおいて、母親は、その存在そのものを受容しきってしまう。

それもそうだ。だって我が子が可愛いのだから。可愛くて仕方ないのだから。可愛くて可愛くて、その子が求めるものを、どうしても与えずにはいられないのだから。我が子を可愛いと思った時点で、彼女の母性本能は、すでに正常に機能し始めている。

混在的一者の基本的図式

この母性本能による「全受容」こそが、母子一体感の本質であり、母と子を一者化させる最大の要因である。

子供には何の力もないが、その無力さこそが、母性本能に支配された母親にとっては、たまらない魅力となる。母親は決して「子供を守らなければならない」と思うのではない。ただ守りたくて仕方がなくなるのである。

まとめると、妊婦では、母親の肉体が、無力な胎児である主体を包み込む。胎外妊娠期間では、母性本能が、無力な乳児である主体を包み込む。このような形でもって、母と子は一者化する。

ここに混在的一者の、もっとも基本的な構造が表れている。

男性原理と女性原理

（1）定義しておくべきこと

ヘルメスの杖を貫く原理

これより（次章）教育の段階に入るにあたって、私はここで、どうしても「男性原理と女性原理」について述べなければならない。

これは本座標に限らず、この錬金術の書「ヘルメスの杖」全体をも貫く、大切な原理である。よって、やや抽象的な話になるけれども、どうか読者には、しっかりとお付き合い願いたいところだ。

とはいえ、男性原理と女性原理の発生源まで辿ると、この福音書シリーズを超えた深淵まで開示しなければならなくなる。そのため、ここでは根本的な話まではせず、あくまでも現象的に（現に表れている状態として）二つの原理を呈示したい。

男性原理

まず男性原理であるが、その意味するところは「分けること」である。ゆえに、分離、分化、分析、といった言葉が、まずこの原理に属している。

そして何かを分ければ、その面積や体積は必ず小さくなる。そのため「もともとの状態を小さくする力」もまた男性原理に含まれる。

ゆえに、集中、抽出、収縮、といった言葉もまた、男性原理に含まれてくる。そして、その最も極端な状態が「虚無」である。虚無をそれ以上に収縮させることは出来ないからである。

女性原理

つぎに女性原理であるが、こちらが意味するところは「結びつけること」である。ゆえに、混在、総合、結合、一者化、エロス、といった言葉が、まずこの原理に属している。

そして、何かを結び付ければ、その面積や体積は必ず大きくなる。そのため「もともとの状態を大きくする力」もまた女性原理に含まれる。

ゆえに、放散、拡大、膨張、といった言葉もまた、女性原理に含まれてくる。そして、その最も極端な状態が「無限」である。無限をそれ以上に拡張することは出来ないからである。

（２）移行の概観

女性原理の支配

人生始発の情景である「混在的一者」では、明らかに、女性原理が主要な働きを見せていた。そこでは主体と母親が「結びつけられている」からである。妊婦では “肉体的に” 両者が一者化しているし、胎外妊娠期間では “心理的に” 両者が一者化している。

それは女性原理（母性原理）のマックス状態だとさえ言えるだろう。男性原理の担い手である主体（息子）の役割が、極めて薄弱だからである。

とくに肉体的な妊娠初期の場合など、主体はちょっとした細胞の塊に過ぎない。それ以外の部分はすべて女性（母親）である。

そうであれば、このとき男性原理の担い手（息子）が出来ることは何もないと言ってよかろう。よって、その結果という形で、女性原理が “占拠的な” 優勢を占めることになるのである。

もちろん、母親と主体が “分離する” 出産のシーンでは、妊婦初期の状態よりは、ずっと男性原理が強く働いている。子宮に包まれていた十月十日の間に、息子の男性原理が、順当に育まれていったのだろう。ここでの男性原理とは、要するに「自律性を発揮することによって生じる分離力」のことである。

といっても、そこから始まる胎外妊娠期間においても、主体（乳児）が男性的に（＝分離的に）出来ることなどは、たかが知れている。なにしろ彼（乳児）は、わが母をして、それを自分の一部だと信じているのだから。

だからこそ主体は、母親の言動が自分の意に沿わないと、それを理不尽だと思って泣きわめくのだ。

つまり物理的に見れば、明白に、母親と主体（息子）は別のものなのに、心理的には、主体には、そのことが全く分からないのである。彼は自分と母親を一つのものと思っているのである。これはまさに、男性原理の決定的な欠如ということであろう。

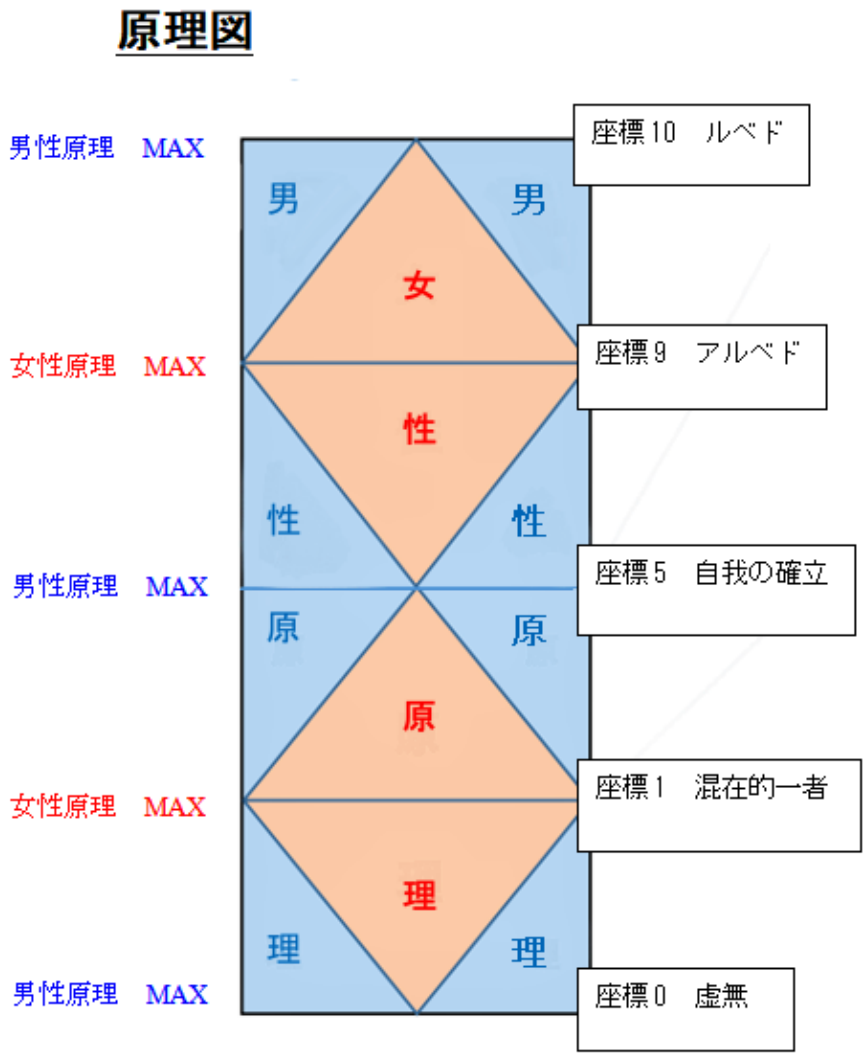
混在的一者においては、主体の男性原理など、その程度のものである。プールの中のミジンコ一匹みたいなものである。よって、やはり、この期間の支配者は、確信的に息子と自分を結び付けて考える、母親（女性原理）と言えるのである。

二つの極点を結ぶ過渡的期間

そんな混在的一者が、徐々に男性原理の“分ける働き”の干渉を受けていくのが「教育の段階」の進展である。初期、中期、後期、という段階（＝座標 2，3，4）を経るにしたがって、男性原理の干渉力はどんどん強くなっていく。

そして座標 5 の「自我の確立」に至って、男性原理は、ついにそのマックス状態を迎えることになるのである。

どうか読者には、次に掲げる図を見ていただきたい。私が「原理図」と呼んでいる図である。



2022-05-26 ＼ (7 ＼).png

※　この原理図は、座標図と違って、図が直線で描かれている。これは単に視覚的な分かりやすさを求めた結果に過ぎない。座標図も原理図も、本質的には同一のものである。

上掲の原理図を見れば分かるように、「５自我の確立」における女性原理の拡がりは、もはや交差した線分が作り出す “点” ほどしかない。自分以外のものを分離しきった主体の意識は、ついにここまでの収縮、収束を実現するのである。

それゆえ自我の確立段階は、まさに “分けること” である、男性原理の権化だと言ってよいだろう。自然、この段階まで至ると、たとえ主体が女性であった場合でも、精神的には、かなり男性化してしまう。そうした実情がある。

となれば、自我の確立（男性原理 MAX）は、混在的一者（女性原理 MAX）のアンチテーゼなのである。アンチテーゼとは「反対の命題」「正反対のもの」のことだ。

そして教育の段階は、その二つの極点を結びつける、過渡的期間だと言える。

したがって、教育の段階に特徴的なことは次のようなことだ。

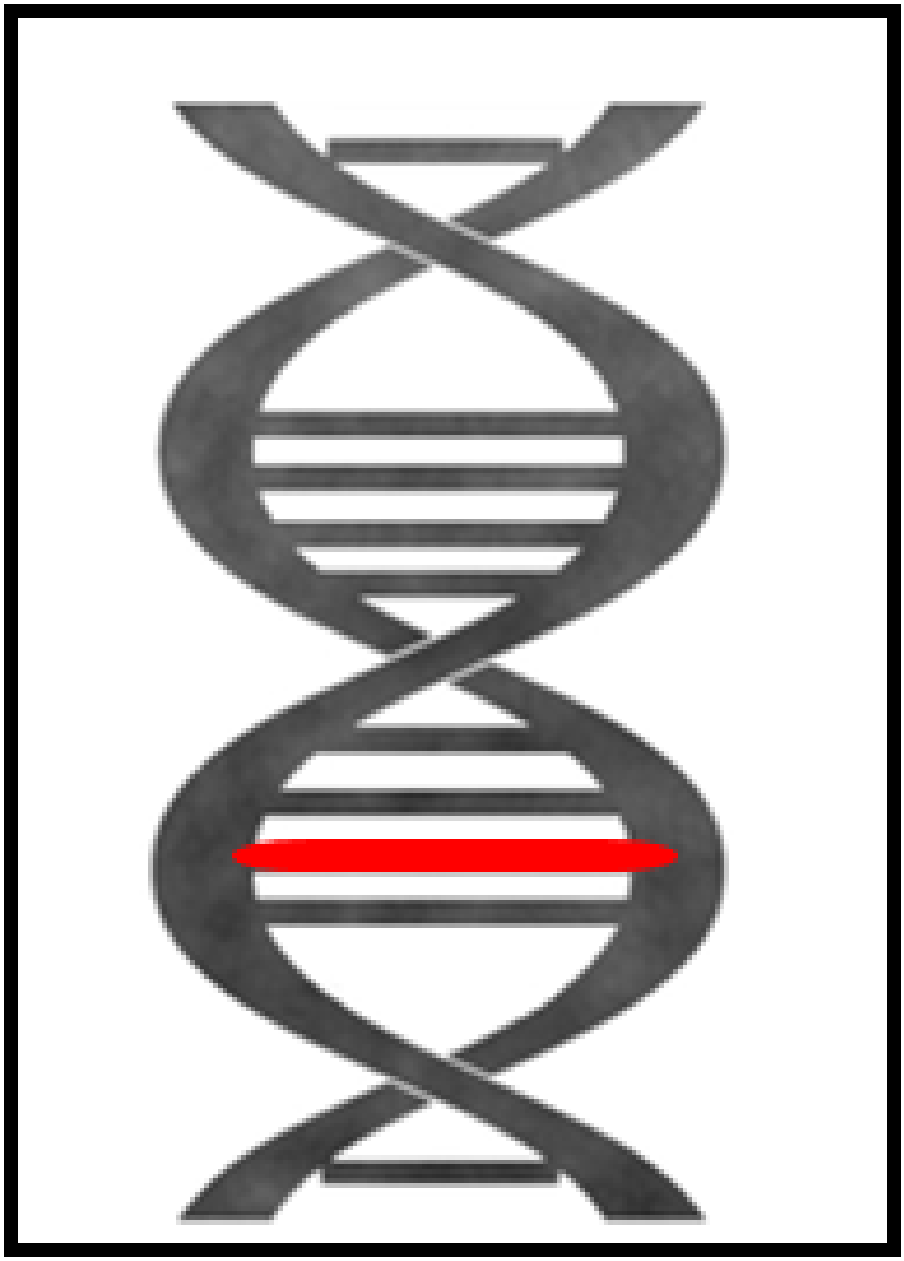
すなわち、女性原理によって包摂されているが如き「母 - 息子」の閉鎖世界（混在的一者）に、両者を分離するべく、ついに男性原理が干渉してくる、ということである。

もっとも「干渉してくる」などと言うと、主体にとっては、完全に受け身のニュアンスとなってしまう。

しかし、これは実状とピッタリとはそぐわない。なぜなら次章で見るように、主体（息子）のほうも、自ら男性原理の干渉を望むからである。

座標２　教育の初期

（１）男性原理の干渉



2022-11-22 ＼ (8 ＼).png

冒険の楽しさ

教育の初期とは、主体が「ハイハイをする赤ちゃん」になってから、幼稚園や小学校など“家庭外の”共同体に通うようになるまでの期間を指す。いわゆる「家庭内教育」がメインとなる時期だ。

これについて語るために、まず初めに、読者に、ちょっとした質問をしてみたい。

仮に、遊園地のアトラクションの前に、「驚きのスリル、ドキドキのアドベンチャー」などと書かれている看板があったとしよう。あなたは、それを見てどう思うだろうか。

たぶんであるが、大方の人は「これは面白そうだな」と思うのではないだろうか。そして迷うことなく「そのアトラクションに乗ってみたい」と思うのではないだろうか。私もやはり、これに乗ってみたいと思う。

だが、その看板には確かに「危険性」と「未知のものに対する不安」があることが明示されている。

なにしろスリルは、恐怖感や緊張感、不安感を意味するのだし、アドベンチャーは冒険という意味なのだから。危険を伴わない冒険など、それこそ冒険の名に値しないだろう。

そうだとすれば、ここには、ある種の矛盾があると言わざるを得ない。

なぜなら「危険性、恐怖感、不安感」――これらは、混在的一者（母子一体感）として安息していた主体にとって、紛れもなく“嫌なもの”だったからである。

それはそうだろう。これらは、どれもこれも「それまで自分が保持していた安息を奪い取るもの」に他ならないのだから。

にも関わらず、私たちはスリルとアドベンチャー、恐怖感や冒険を、ある意味で好ましいものだと考える。しかも、それらに身を投じるさいに、そこに安息を奪う厳しさや辛さが伴うことを「当然のこと」として納得してしまっている。

これが矛盾でないというならばである。そうであるなら、どこかに私たちの「考え方の転換点」があったのだ。

私たちが、それまでの安息を抵当に入れ、その代わりに冒険を手に入れるような転換点が。

そして、この重要ポイントこそが「教育の初期」なのである。そして、その内情は「男性原理の干渉」と「男性原理の干渉を求める心理」の成立ということになる。

母と息子を引き離す力

さて、混在的一者は「母‐息子」が結合した閉鎖世界である。

しかし、最終的なことを言えば、間違いなく、母親と息子は別々の人間だ。そうであるからには、いつかは両者は、各々別の暮らしを立てて生きていかなければならない。それが人間としての自然な摂理である。

ということは、どこかの時点で「母と息子を引き離す力」が働き出さなければならない、ということだ。そして、その力は、むろん男性原理である「分けること」から派生するものである。

そうだとするなら、では家庭において、最初に母親から息子を引き離すのは誰だろう。最初に主体（息子）に「閉鎖世界の外の世界」を垣間見せるのは一体誰だろう。

その答えは言うまでもなく、主体の「父親」ということになる。

これを、より明確に示すならば「教育の初期段階にあたる家庭教育において、最初に男性原理の体現者となるのは、主体の父親である」ということだ。

夫が父親になる

如上のように、教育の初期にいたって、初めて「父親」に登場して頂いた。

では混在的一者の時期には、父親はどこにいたのだろう。

これに端的に答えるならば、父親は「いなかった」のである。もっと正確に言うならば、主体の目には、ほぼ完全に「父親が見えていなかった」のだ。

さらに描写の確度を上げるならば、そのとき主体の関心の大半は母親に占められていた。それに比べると、父親に対する関心は、限りなく薄いものでしかなかった、ということである。

いや、むろんそこに男性はいた。ただし彼は、この混在的一者の時期にあっては「夫」でしかなかった。つまり彼は、主体の母親を「夫」として支えていた。

けれども残念ながら、混在的一者における「主体にとっての世界」とは、飽くまでも「母 - 息子」の世界なのである。

ということは “男性” は、そのとき「妻 - 夫」という、いわば主体にとってのアナザーワールド（別の世界）で活躍していたことになる。要するに、夫である彼は「主体の世界」には属せていなかったという訳なのだ。

もちろん混在的一者のこの時期であっても、夫は、ポテンシャルとしては、すでに父親であっただろう。

しかし、そのとき主体は、微塵も父親という存在を求めていなかった。よって夫は、父親の役割を担いたくても、どうしても、それを現実のものとすることが出来なかった。そういうことである。

しかし教育の初期に入ると、その前後から主体のなかで「男性原理を受け入れる心理状況」が醸成されるようになる。

これによって主体の視界に「父親」が入ってくる機会が訪れる。そして、この時にこそ、それまで夫でしかなかった男性は、主体にとっての「父親」へと変貌するに至るのである。

かくして、ついに彼は “父親として” 主体に「母親との分離」の手ほどきをし始めることになる。

父親の干渉による効能

　このように主体の視界のなかに父親が入ってきたのは「ヘルメスの杖の梯子登り」という生の義務が正常に、この時期の主体に働きかけたからだと言ってよいだろう。

　そもそも主体は、やがては「自我の確立」という、分離性の極みに到達しなければならないのだ。であれば、そろそろ男性原理の幾分かは、どうしたって受け入れる必要がある。主体は、それを本能的、本性的に感じ取ったのだ。

　この父親の干渉によって、主体の行動範囲は、かなり広くなっていく。

　つまり混在的一者の頃には毛ほどもなかった自主性、自由性、自在性を、主体はこのとき獲得するのである。ただし、ある程度の危険性を覚悟することによって。この事こそが、父親の干渉によって主体に与えられる、最も注目すべき効能であろう。

　試みにここで、今まで述べてきた内容を、一つの「典型的な情景」として表現してみよう。

　教育の初期にいたって、ある程度動けるようになった主体は、父母に連れられ公園に訪れている。そこで主体は、いたずらをしたり、少し危険な遊びをしたり、はたまた泣いて笑って大暴れをすることもある。

　そのとき母親は、子供の危うさにハラハラして言う。

「そんな事はやめて、危ないから！（＝そして安らいだ状態に戻りましょう）」

　ところが父親は、その同じ危うさを肯定して善しとする。彼は、

「少しぐらいなら怪我をしたって構わない。むしろ痛みを知ることは結構なことだ。それこそ子供にとっての学びなのだから」

　と、笑って子供の危険性を受け入れる。

　子供が転んで泣けば、母親は主体を抱きしめて慰めてやる。一方の父親は、その転んだことを笑って受け入れている。

　このような感じの情景が「教育の初期」の原風景だと言えるだろう。

（2）父性愛について

父親が教えるもの

いまご覧にいれた父親は薄情だろうか？

だがこの父親は知っているのだ。傷つきながらでしか、危険を覚悟しながらでしか、人が「冒険」を実現できないということを。それでもなお、冒険をしなければ、人が、自分を囲む世界を広げられないことを。

そして、広い世界においてでしか、人は、自分の能力を高められないことを。また、能力を高めなければ、人が、自分の居場所を確保できないことを。

他方、軟らかく温かい泥に保護されて生きている「井の中の蛙」は、そのまま社会に放り出されれば、その社会の最底辺で、不自由に喘ぎ苦しむしかない。彼らにとっての社会が “戦場” ででもあれば、井の中の蛙は、そこですぐに死んでしまうかもしれない。

けれども、我が子にそのような惨めな思いをさせたい父親など、いはしないのだ。だから父親は我が子に、あらかじめ “冒険” をさせる。たとえそれが、どんなに傷つくことや危険に事欠かない過程だとしても。結局そうした冒険のなかでしか、主体の能力は、決して高まらないからだ。

それはもちろん、主体の母親も知っていることである。

けれども彼女の場合、子供への溢れんばかりの情愛が、その目を曇らせてしまう。

彼女は、ずっと我が子と一緒にいられることを “そんな事あるはずもないのに” 当然視してしまうのだ。だから、いつまでも、どこまでも、その羽毛のような優しさでもって、子供を包み込もうとしてしまう。

父親が知っていること

しかし父親は「いつか子供たちが、両親から離れたところで独立し、そこで一人きりで生きていかなければならない」ということを知悉している。

なぜなら自分では子供を産むことない「男」という種族は、その “命をつなぐ” という営為に疎いぶんだけ「人の有限性と孤独」とを、強く意識せずにはいられない生き物だからだ。

人間いつかは一人で生きることになる。誰にも頼れない孤独を舐め尽くす時がくる。これが “分けること” という原理を背負わされた、男にとっての真理である。

だから父親は、そうやって一人になったときに、せめて我が子が困らないようにしたいと願う。そのためにこそ、子供に「自立するための教育」「独立のための訓育」を授ける。そして、そこには当然、ある種の厳しさが伴ってくる。

厳しさとは何だろう。

それは「苦難を承知で、それでも何かを成し遂げさせようとする事」であり、ある程度の突き放しであり、相手が自分から離れていくことを促す態度である。それゆえ、そっけない、かなり薄情な印象を与えるものである。

しかし、これもまた愛なのだ。たしかに、混在的一者の時期に見られる「優しい母性愛」とは真逆の見た目ではある。けれども子供の先々を思えば、これもまた、どうしても欠かせない “一方の雄” とも言うべき、有力な愛の傾向なのだ。

それは、ただの一言で言ってしまえば「父性愛」と呼ぶべきものだろう。父性愛――この男性原理に満たされた「厳しい愛」もまた、母性愛と同等に認められるべき、重要な愛の姿なのである。

主体がそれを求める

そして既述したとおり、このような父性愛を、教育の初期にある主体は、自分自身から求めるのである。強制されているのではない。主体自身が厳しさを、スリルとアドベンチャーの幾分かを欲しがるのである。

とはいえこれは、時期的には、幼児の家庭教育の話だ。よって、その環境下にあって、大部分のシェアを占めているのは母性原理（女性原理）ではあろう。4、5 歳の子供を見れば、彼らがまだまだ優しい母親の愛を求めているのは容易に分かる。

しかし「それだけでは足りない」と主体の心の深層が語りだすのも、この頃なのである。そろそろ僅かなりとも、父性原理からの干渉が、同じ家庭教育の場で必要になってくるのである。教育の初期では、そのような「二つの原理のバランス的な揺らぎ」が生じるのである。

では、ここまでを簡単にまとめてみよう。

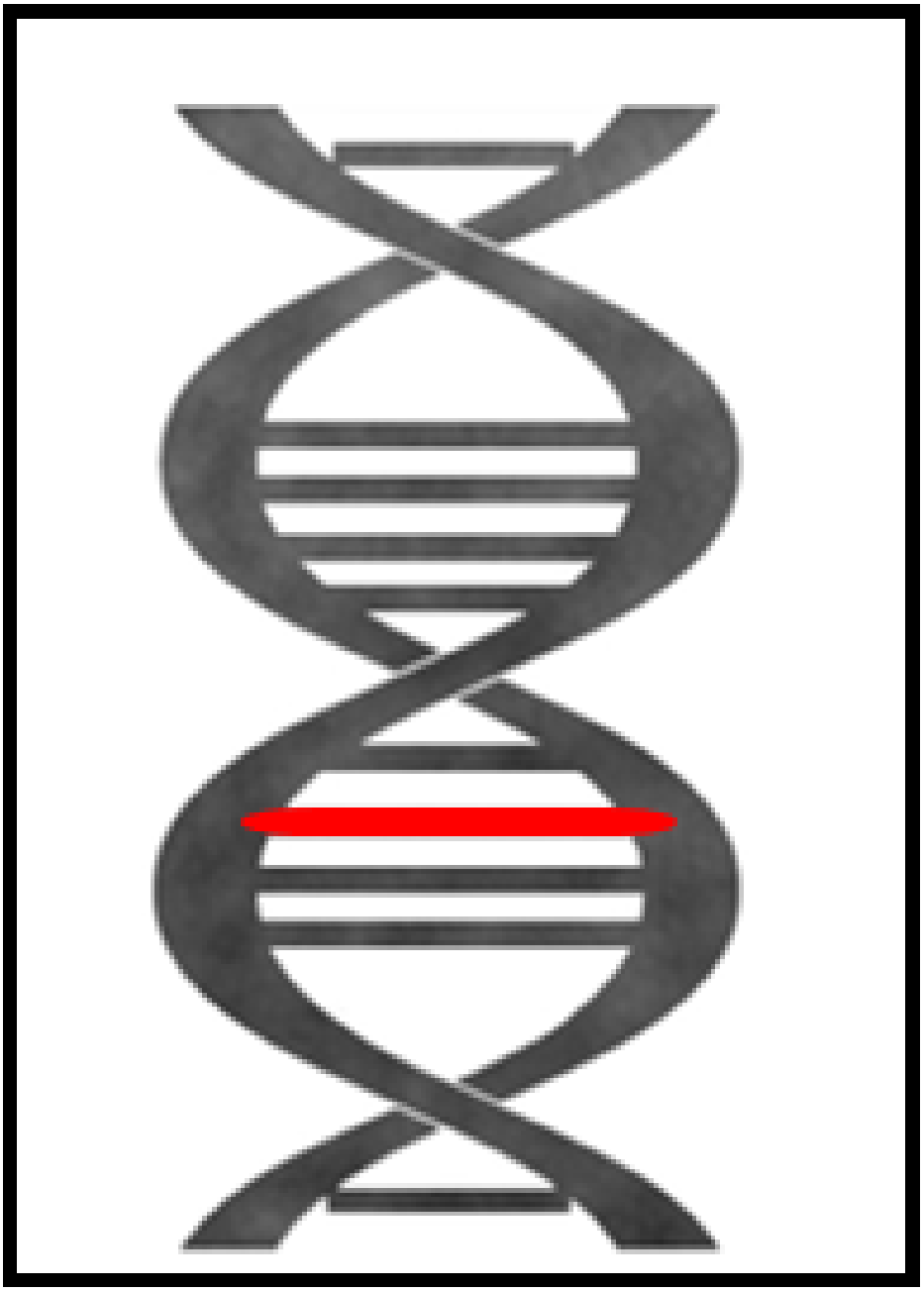
まず混在的一者の時期に、母子一体感によって、主体の心に「強い存在肯定の土台」が築かれる。つまり主体の中に「自分という存在を肯定的に捉える気持ち」が確証的に形成される。

この土台の上にあって、主体の心に「外界への好奇心」が芽生えるのが「教育の初期」である。そして、このささやかな好奇心を育んで、それを主体の「将来における社会的独立性」に結び付けようとするのが、父親による “厳しい愛” なのだ。

このような父性愛が主体に働きかける端緒（はじめの一歩）をもって、私たちはこれを教育の第一段階（初期）としたのだった。

座標３　教育の中期

（１）所属と自己責任

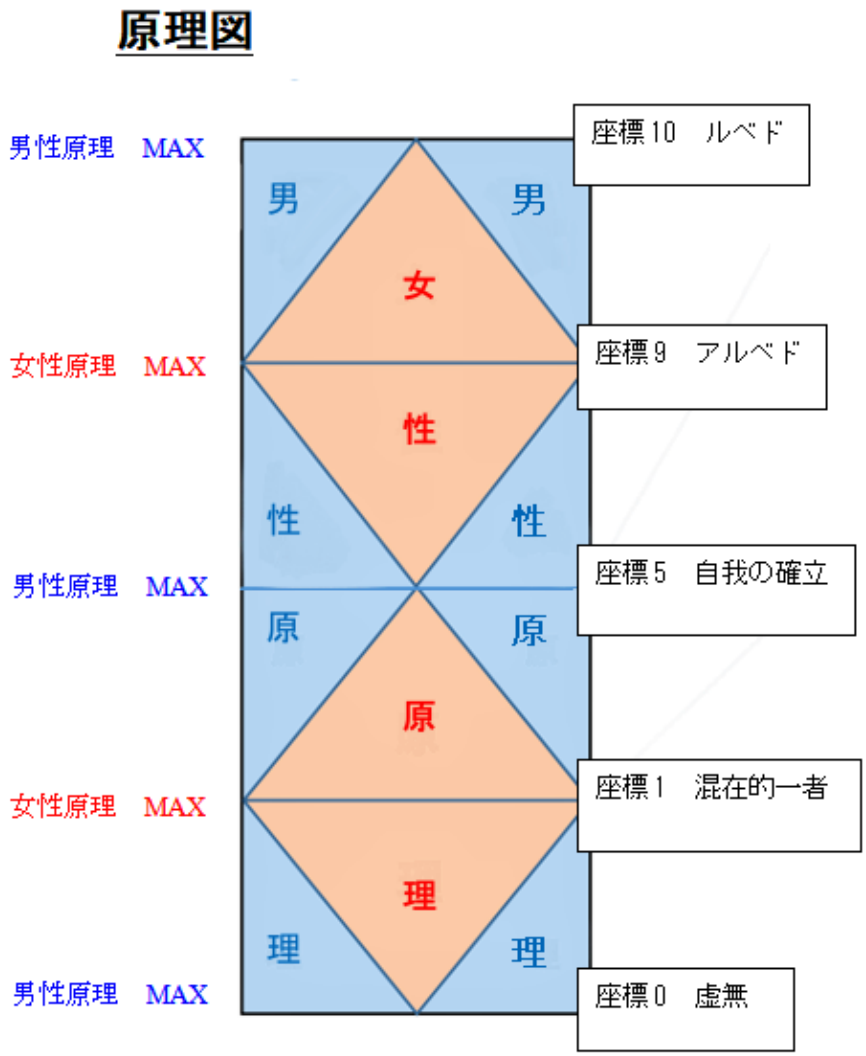


2022-11-22 ＼ (9 ＼).png

二つの原理の中間

女性原理は「結びつけること」であり、男性原理は「分けること」である。

そして、すでに述べたように、混在的一者（座標１）は、女性原理のマックス状態。自我の確立（座標 5）は、男性原理のマックス状態である。



2022-05-26 ＼＼ (7 ＼＼).png

そして、混在的一者と自我の確立のあいだには、両者を架橋するものとして「教育の段階」がある。座標でいうと 2,3,4 がこれに当たる。

本項で扱うのは座標３となる「教育の中期」であるが、図的に言って、これはいわば教育の段階の “中央” に位置していることが分かる。

となれば、そこでは女性原理と男性原理が “等分に” 働いている状態が予想される。つまりそこでは「結びつけること」と「分けること」が同等に作用しているはずなのである。

そうなると、教育の中期における具体的なテーマは、おそらく「所属と自己責任」ということになりそうだ。

最初の所属世界

混在的一者の段階にあったとき、主体はまるきり母親に依存し、まるきり母親に所属していた。主体の主観にとって、母親は、まさに所属世界そのものであった。

いや、むろん客観的には、一人の母親が「世界そのもの」だなんて事はあり得ない。けれども幼い主体にとっては、たしかにそのように感じられるのである。

だから母親から見放されれば、主体にとっては、自分が所属する「世界そのもの」を失ったも同然だ。

それはつまり「世界滅亡」ということだから、当事者にとっては相当に怖いことであろう。換言すれば、それは主体にとってのカタストロフィー（大破滅、大破局）だからである。

これを大袈裟だと笑ってはいけない。

いま対象となっているのは「母‐息子」間という世界である。だから、たしかに客観的には、滑稽なまでに「小さな領域」の話でしかないだろう。だが、たしかに妊婦が中絶をすれば胎児は死ぬし、母親が育児放棄をすれば乳児は死ぬのである。

つまり命が懸かっているのだ。いくら表現が大袈裟に思えようとも、その大袈裟さが、乳幼児期の主体にとっては紛れもない真実なのである。

所属世界の変化

これに対して、教育の中期においては、主体は、学校や職場、地域社会などに所属することになる。母親単体と比べたら、格段に大きな「所属世界」を、主体は獲得するわけである。

もっとも「職場」なんて言葉を出すと、読者から、

「なんだ、主体は、急にそんなに大きくなってしまったのか？」

と驚かれそうだ。

しかし実のところ「教育の中期」は、もしかしたら、主体の人生そのものを、貫くかもしれない心理段階なのである。

事実、死ぬまで、この「教育の中期」に留まる人も多い。むしろ人類のなかで、もっと

も多くのシェアを占めるのが、この「教育の中期に属している人々」なのだ。

そのように多くの人たちが、学校や職場、地域社会に所属している。そして意識してはいないものの、彼らはこうした共同体に“所属し、依存している”という点で、明らかに母性原理（女性原理）に与っている。

すなわち彼らにとって、学校や職場、地域社会は、ほとんど「世界そのもの」なのである。そう、乳幼児としての主体にとって、母親がまさに「世界そのもの」であったように。

学校を母校と、職場を終身雇用の場と、地域社会を故郷と呼ぶのならば、そこには確かに「母なるもの」のイメージが重なっている。

自己責任と男性原理

ただし、学校や職場、地域社会が、客観性、社会的役割を持っている点では、そこに男性原理が働いていると言える。そこでルールを破ったら、無慈悲にそこから排斥されてしまう、という点に、男性原理の「分ける」性質が働いているからだ。

つまり、そこには個人的な感情では破ることの出来ない「法と秩序の支配」があるのである。この点、自分の子供である限りにおいて、子供のどんな欲求も通させてやっていた母性本能（女性原理）では太刀打ちできないぐらいの客観性が、そこには働いていると言えるだろう。

この共同体において法やルールを破れば、停学、退学、減俸、免職、告発、刑事罰、といった形で、主体は、共同体からの排斥を受ける。もちろん、そうなる以前にも、きっと厳しい態度での勧告があることだろう。

そうした勧告を受け入れれば、主体は共同体に居残れるが、そうしない場合には、共同体から排斥されるほかない。ここに明瞭に「自己責任を取らされている」主体の姿がある。

二つの原理の相克

ただし、ここで言っている共同体（学校、職場、地域社会）は、まだ規模が小さく、広範な普遍性（客観性）は持っていない。

だから、ある共同体から罰を言い渡されても、そこ以外の集団に自分の居場所（所属）をシフトさせれば、主体は、またかつての「通常の生活」を送れる場合もある。転校や転職、引っ越しなどによって、まるで何事もなかったような、新生活を始めることが出来るのである。

もしそれを阻むものがあるとすれば、それは小規模な共同体をして、これを「世界そのもの」のイメージと重ねあわせてしまう、女性原理（母性原理）の働きだろう。

この場合、学校や職場、地域社会は、まるで母なる大地のように、主体にとり「そこで生まれ、土に還る唯一の場所」となる。つまり強く母性原理が働くと、人は「他の場所や他の可能性、他の世界があること」を、想像だに出来なくなってしまうのだ。

逆に言うと、ある場所からの “分離” は、当然男性原理の働きによるものである。したがって、その男性原理の働きが弱いと「既知の共同体から分離して、自分の居場所をシフトさせる」という発想自体が、そもそも生まれてこなくなるのである。

結果、ある共同体からの罰、排斥勧告は、主体のなかで絶対化してしまう。そしてついには、かような排斥勧告が「そこの大地に還ること」への強制となってしまう。

つまり主体は、そこで死ぬしかなくなるのである。

このとき、社会的生命が失われるばかりではなく、場合によっては肉体的生命までが失われることもある。すなわち、ここに、転校もしなければ転職も引っ越すもしないで「自殺」する人間像が現れるのだ。

実に痛ましい話であるが、このような悲劇が起こる頻度は、決して少なくはない。

（2）共同体への適応

蓄積された情報の利便性

教育の中期に至った主体には、もう一つの「生き方のテーマ」がある。

それは上に掲げた、学校、職場、地域社会――ここから先は、一括して「共同体」とのみ表記することにしよう――に適応するという課題である。

共同体には、長年にわたって培われた「生活を便利にする情報」が蓄積されている。だから、その情報を曳いてくる事によって、主体の人生は、きわめて濃密な “質” を獲得することになる。

たとえば、原始生活を送っている人が、数人いるだけの孤島に生まれたら、その場合の「人生の質」は、それほど高まりようがない。

しかし彼が、数千年の歴史を持ち、その歴史の情報を、書籍やコンピューターでもって、いつでも閲覧できるような “文明社会” に生まれ落ちたらどうだろう。そのとき主体の「人生の質」は驚くべき高まりを見せるのではないだろうか。

ここにこそ、共同体の輝かしい価値があると言えよう。すなわち、文明を持った共同体に適応すれば、主体はそのとき、数千年におよぶ「歴史のエッセンス」を身につけた能力者になれるのである。

これは本当に、どんなにか彼の人生を資するか分からないことだ。もちろん、その歴史のなかには、自然科学の歴史も、芸術や宗教の歴史も含まれている。つまり、ここで言う歴史は、文化とイコールで結んでよい “歴史” なのである。

模倣、暗記、服従

そのように人生の質を高めてくれる「共同体への適応」は、果たして、どのような形式によって執り行われるのだろうか。私には、それを端的に「模倣、暗記、服従」と表現することが出来るように思われる。

模倣、暗記、服従――この三つは「空間、時間、倫理」という感覚上のカテゴリーに対応している。拙著『アルベド』の「教育の段階」では、これを詳細に論じているので、興味のある方は、どうか参照して頂きたい。

ここでは簡単に進めてしまうが、まず共同体という空間のなかに「芸術的情報の代弁者」がいるとする。そのとき、かかる代弁者の言行を模倣することによって、主体は共同体の情報を、自分のもとに呼び込むことが出来る。

つぎに、時間的系列のなかで整理されている情報がある。これを「学問的情報」と言ってもいいだろう。そのような情報を暗記することによって、主体は共同体の情報を、自分のもとに呼び込むことが出来る。

そして共同体が課してくる倫理的規範というものがある。要するに、法律であり道徳である。

そのような倫理的規範に服従することによって、主体は共同体から排斥されることなく、その共同体内での、安定した生活を約束されることになる。

もっとも「こうした “生活の安定” が前提にならなければ、そこでの模倣も暗記もあり得ない」というのが実際のところだろうとは思うが。

情報のストロー

ということは、「模倣、暗記、服従」というのは、言わば、共同体が持っている情報に「差し込むべきストロー」なのである。

このストローを差し込むことによって、共同体の情報は、ストローの中を流れつつ、最終的に、主体のもとへと移行されることになる。

したがって、ストローを差し込むのを止めさえしなければ、情報はいくらでも主体のもとに注がれることになる。たとえば生涯読書を続ければ、彼は相当の知識保持者となれるのである。

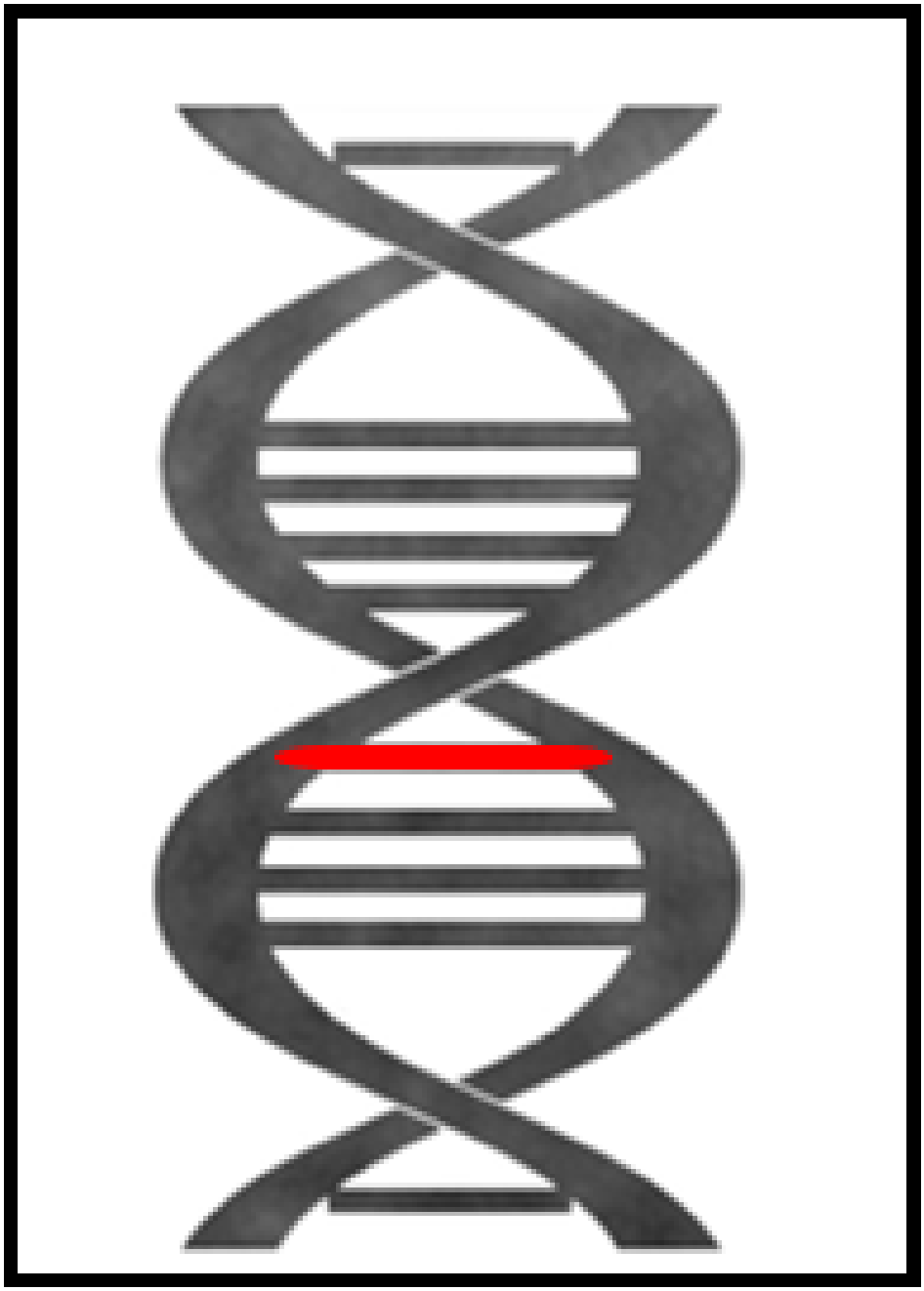
そのように情報が主体のもとに移行するほどに、主体は「共同体の代弁者」としての地位を確立していく。

そして、そうなると今度は、主体のほうが「共同体への新参者」に対して「模倣、暗記、服従」という要求を突きつける事ができる立場になれるのである。

かくして主体は、教育の中期の上位体現者となる。

座標４　教育の後期

（１）自我の抽出



2022-11-22 ＼ (10 ＼).png

錬金作業の第二段階

混在的一者のところで触れたことだが、錬金術における最初の作業は「材料を混ぜて加熱し、ドロドロのペーストを作る」ことだった。

そしてこれに照応するようにして、母と息子が混在し、その母性愛によって加熱されている状態が「混在的一者」であったと言えるだろう。

これに対して、本章の論述は、錬金術に当てはめると、すでに作業の第二段階に入っている。そして、かかる第二段階の課題とは、

「ドロドロのペーストを蒸留することによって、混在していた元素を引き離し、混じりけのない諸元素を抽出する」ということになるだろう。

あまり聞きなれないかもしれないが、この「蒸留」とは、ある液状の物質を「気体にしてから」「もう一度液体に戻して」精錬することである。

そこには加熱（気体化）と冷却（液体化）の作業が含まれている。

そしてこの抽出工程に、より徹底した精密度を求めるならば、術師は、その加熱と冷却の作業を、何度も繰りかえす労務を覚悟しなければならない。それゆえ蒸留とは、かなり根気がいる作業だと言えるだろう。

実際の錬金術師たちが、蒸留によって抽出しようとしていた元素が何であったか、私は知らない。

だが、もともと私たちは、そうした物質には関心を持っていなかった。私たちは飽くまでも、人間存在の在り方から、何らかの「価値のある要素」を抽出しようとしていたのだった。

いずれにせよ、この段階の主要テーマは、蒸留によって特定のものを抽出し、その特定されたものと、それ以外のものと「分けること」にある。ゆえにここに、かの男性原理が強く働いていることを知っておきたい。

さらに言うと、ここには「ある特定のもの」と「それ以外のもの」という、二つのものの対比が見られる。ならば、これはそこに「二元的な世界観」が現出しているということでもある。

教育の後期のテーマ

この二元的な世界観が、現実の人間関係のなかで徹底されたものが、「自分」と「自分以外のもの」が純粋に弁別された「自我の確立」の段階である。

よって教育の後期のテーマとは、要するに、そのような「自我の確立」状態に到達するための “努力” ということになるだろう。これをやや錬金術風に表現すれば、

「自我という元素を手に入れるための、蒸留による抽出作業」

ということになる。あるいはこれを、もっと単純に「自我の抽出作業」と表現するこ

とも可能であろう。

そして、その自我を抽出するための理念的な蒸留道具が、次項に出てくる「集中、因果律、遵法」である。これらは、錬金術に置き換えれば、かまどの火や冷却水、炉やフラスコに当たるものと言える。

自我を抽出するために

さて、すでに述べたように、教育の後期における主体のテーマは、「自我の確立」に到達するための “努力” である。より簡明に言えば「自我を確立するための努力」であり、「自我を獲得するための準備作業」である。

これを具体的な定型文にすると「主体は〜によって、自我を獲得しようとする」という文脈になる。

先回りして言うと、自我とは、空間的には個性、時間的には合理性、倫理的には良識のことを指している。よって、教育の後期に至った主体は、空間的には、

「集中によって、個性を獲得しようとする」

のであり、時間的には、

「因果律によって、合理性を獲得しようとする」。

そして倫理的には、

「遵法によって、良識を獲得しようとする」のである。

もちろん、ここに具体的な内容はなく、いわば言わんとしていることの表題に過ぎない。そこで（2）以降では、これら「集中、因果律、遵法」と「個性、合理性、良識」との関連について、詳しく見ていくことにしよう。

（2）集中と個性

模倣への集中

教育の “中期” における、主体の生き方のテーマは「共同体への適応」だった。それは共同体が持っている高価値の情報を、自身にインストールするためには、どうしても必要なことだった。

しかし当然、このテーマが達成されると、主体は、彼自身であるよりは、どうしても「共同体的な存在」になってしまう。

空間的には、主体は模倣を行うことによって、共同体の情報を自分のほうに引き寄せていた。それ自体は大いに意義のある行為であるが、これをやっている限りは、主体は共同体の模倣体でしかないことになる。

しかし――蒸留を繰り返すように――模倣に模倣を積み重ねて、その精錬の度合いを深めていくと（＝模倣への集中）、次第に主体の思いの方向性が変わってくる。すなわち、その模倣の精錬練達の極みのなかで、主体は逆説的に、

「素晴らしい手本なので、これまで忠実に、その手本を真似てきた。しかし、手本より劣ることになろうとも、ここだけは、私としては、どうしてもこうしたいのだ」

という部分を見つけるようなるのだ。

違和感を形にする

これは共同体に対する違和感であり、あるいは、さらにそこから一歩進んだ「自分が自分でありたい」という強い欲求である。

このような欲求を感じることこそが、主体にとって、個性獲得の始まりとなる。

この欲求に従って、彼が実際に「ここは自分としては、こうあるべきだと思う」という思いを形（行為）にしたとしよう。

そうすると、そこには紛れもなく「主体にしかこの世に現わせないもの」が刻印された事になる。たとえそれが微小な部分に過ぎない相違だったとしてもだ。

それは真に「個性」と呼ばれるものである。そして、その上で、

「この行為に対し、もし共同体から批判が与えられるならば、その批判はすべて受け入れよう」

という形で主体の肝が据わったならば、そのあたりで、だいたい彼の個性は確立されたと言ってよいだろう。

なぜなら、主体の人格は、いまや共同体と分離して、その上でこれと改めて対峙しているからだ。しかも、逃げ隠れせずに堂々と。

必要とされる勇気

共同体との分離と対峙、これは本当に大変なことである。というのも、協調的な社会性に不足していない人格が、
「自分が自分であることが、共同体からの批判の対象になってもいい」
と割り切るためには、かなりの勇気が要るからだ。
自分がどれほど模倣に集中したか。自分がどれほど共同体の情報を取り込んだか。その実績に対する自負と自信がなければ、なかなかこういった覚悟は固められない。
事実、やるべきことをやらないかぎり自信などつく訳もないし、自分に自信がない人間に勇気など出てくるはずもない。
そもそも多くの場合、勇気と見えるものは、単なる身の程知らずの蛮勇なのである。
そして、身の程を知らない（＝自分を知らない＝自我ではない）蛮勇は、すぐに共同体によって角を矯められてしまう。
そうであるならば、ここで必要とされているのは、決して俄かづくりの勇気などではない。ここで必要とされているのは、繰り返し蒸留を行うような、地道な精錬努力の果てにある、本物の「自信、自負、勇気」なのである。

（3）因果律と合理性

原因と結果

因果とは「原因と結果」のことである。

つまり「〜によって〜が生じる」「〜のせいで〜が起こる」といった流れの文脈であり、このようなスタイルでものを考えていくことを因果律という。

もっとも、仏教では因と果のあいだに縁を置き（＝因縁果）、哲学者のヒュームは「因果を結びつけるのは可能性に過ぎない」と言う。どちらも因果律の精緻さをアップさせたり、より内容を厳密化させるためのヴァリエーションだと言ってよいだろう。

なんにせよ、因と果（原因と結果）を言っておけば、それで因果律の基本は、だいたい言い尽くされていると言ってよい。

この因果律を用いると体感的に分かるのが、そこに「時間の流れ」が生じることだ。

原因が原因のままであるならば、時間は止まったままだ。しかし、原因が結果を呼び込むと、原因が過去となり、結果が今になる。そうして時間が流れ始める。

そして主体が、結果としての今を「新しい原因」として捉えて、そこから「まだ見ぬ結果」を未来に想定するならばである。そのときには主体のなかで、

「かつてこのような事が起こったということは、これからも、こういった事が起こるだろう」

という形での“予測”までもが可能となってくる。そうして、ここに「未来に向かっての時間」までもが流れ始めるのである。

よって因果律は「時間の流れ」と切り離せない代物である。そして、そうであれば自動的に、本節で語られるのは「時間的な話」ということになる。

それに対して、先の「集中によって個性を獲得する」という内容は、空間的な話だったことになるだろう。

暗記情報のいい加減さ

それはさておき、まずは教育の中期から「時間的な話」を掘り起こすとしよう。

そうしてみると、共同体に適応するため、あのときの主体は、共同体の情報を一生懸命に暗記していた訳である。

しかし、共同体から暗記によって得られる情報というのは、けっこう“結果だけ”のものが多い。

確かにそこには因果的な説明もあるのだが、重視されるのは明らかに「結果」のみである。

たとえば歴史年表に書かれているのは、まさに「結果の羅列」であり、これを暗記してしまえば、まあまあテストの点数は取れてしまうのである。

もちろん、その「結果」が正しければ害は少ないが、そこには “小さな” 共同体の利益のために捩じ曲げられた情報もたくさんある。

そして世界的視野に立てば、ときには国ですら「小さな共同体」に過ぎないことになる。

そうしたなかで、残念ながら、その共同体（国）にとってだけ都合のいい「結果」が捏造されることもあるのだ。シナや韓国の反日的な歴史観などは、その典型例と言ってもよいだろう。

また、恣意的ではなくとも、あまりにも浅慮に、あるいは拙速に結びつけられた因果的説明も多い。

それは例えば「医学会において、病気の原因が間違っているのに、なぜか治療法が確立してしまった」「警察によって誤認逮捕が行われてしまった」など、まさに枚挙にいとまがないのである。

時間的自我の芽生えと獲得

こうした現実を見ていて嫌気がさし、主体が「もっと、ちゃんとものの道理を知りたい」「もっと自分自身で、ちゃんと世界の在りようを理解したい」と思ったときが、おそらく時間的な自我の芽生えの瞬間であろう。

そして自分自身で情報をさがし、さらに自分なりの「原因と結果」を組み立てられたならば、それをして「時間的自我の獲得」と言ってもよいのではないだろうか。

なぜなら、そこまで行けば、彼が持っている情報は、すでに共同体の情報というよりも、自分自身によって再構築された「主体自身の情報」になっているからである。

そして、この主体自身の情報の “確度” が際立って高くなった場合、その情報を私は「合理的である」と評価したい。すなわち、そのとき主体は、周りから「彼は合理的な人物だ」と評される資格を持つことになるのだ。

それはもちろん、彼だって間違うことはあるだろう。未来予測に関していえば、むしろ間違うことのほうが多いだろう。しかし、その間違いに対して、

「そこに誤りがあるならば、私自身が責任を取ればよい」

とまで思えたならば、それはすでに、獲得された「時間的自我」の範囲内における出来事なのである。

（4）遵法と良識

法律の重要性

教育の中期における「共同体の倫理に服従する」という主体のあり方を、もっと簡潔に表現するならば、それは要するに「法律に服従する」ということである。

実際問題、私たちは法律に対して服従するしかない。そして法律のほうも、私たちに向かって、つねに強制的に迫ってくる。よって私たちは、場合によっては、法律によって、じつに不愉快千万な目に遭うことがある。

しかし、この一見不愉快な「法律」というものが、この世から消え去ってしまったらどうなるだろう。

これについて読者にも考えてもらいたい。そのときに現出するのは、私たちにとって爽快な「自由の謳歌」だろうか。

いな、断じて違う。そのとき現れるのは、むしろこの世の地獄である。各個人が、てんでバラバラに自分の自由を行使すれば、そこに自由同士の相克が生まれるだろうからだ。

そうしてその相克が軋轢を生みだし、果てには凄惨な争いごとが現れる決まっている。

たとえば、もし信号機が機能しなくなれば、赤信号でいちいち車を停まらせる煩わしさは消えるだろう。それは短期的には爽快なことだろう。だが、交差点に突進する複数の車は、その衝突事故によって、この世の地獄を出現させるに違いないのである。

ここで言っているのは、それと同じようなことだ。法律という調整役が機能しないかぎり、私たちは「自由の相克が生み出す地獄」を減少抑制することが出来ないのである。

遵法の精神

私たちは、たしかに法律によって、幾ばくかの我慢を強いられている。けれども他方、その我慢によって、私たちは「地獄世界の現出」を抑制してもいるのである。

その点で、たとえ不備な法律であっても、まったく法律を失うよりは良い。そのようにすら言える。まさに「悪法は無法にまさる」のである。

だからこそ、かのソクラテスは、悪法に義理立てして毒杯をあおったのである。

教育の後期に到った主体は、そのような「法律の大切さ」を、その心のどこかで、もはや完膚なきまでに認めざるを得ないようになる。

というのも、彼の中で生まれつつある個性と合理性が、かかる法律の重要性を、どうあっても帰結的に「絶対的なもの」として導出してしまうからである。

よって彼は、法律の強制感にブーブー言っているだけの「教育の中期」的な大人げなさからは、すでに遠く厭離している。

むしろ彼は、逆に「共同体を守り、維持すること」に自分なりの責務を感じるような「大人の階段」を登り始めているのである。

そして、ここに「遵法の精神」が生まれる。

遵法とは、強制に対する服従ではない。それは強制される以前に“自主的に”法律を守る姿勢である。そして、それが出来るのは、彼が法律の大切さを、身に染みて分かり得ているからなのだ。

さらにいうと、この自主性が、既存の法律をこえたレベルで働くのが「良識」である。ただし、それについては、次の「自我の確立」で語ることにしよう。

再臨のキリストによる福音書　2 - I

著　　正道

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社